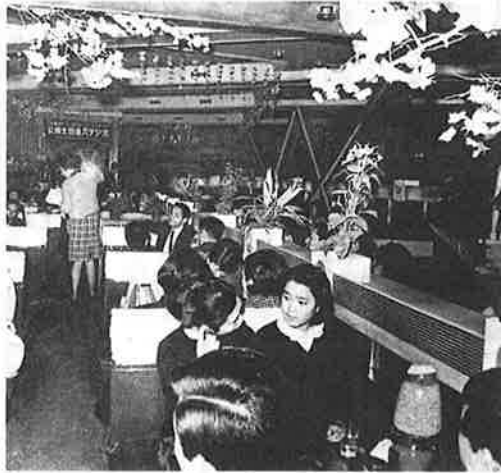


1950～60年代の高度経済成長時代、街には映画館と喫茶店がたくさんあった。映画を見た後に喫茶店へ行くことは、デートコースの定番だった。当時の喫茶店内は総じて



2



1

写真1・2：

「じゅねーぶ会館」の外観と、生放送スタジオを備えていた喫茶店「じゅねーぶ」の店内。
1967（昭和42）年頃の撮影『グラフ北奥羽 1967年版』デーリー東北新聞社より転載

や学生の立ち入りを制限する店が多かった。青森市の場合、学生や子供が入れた喫茶店は工藤パン、コロパン、ガトーしろたえ、サンドリオンくらいだった。現在は喫茶店というより「カフェ」と称した明るく開放的な店が人気である。しかし、高度経済成長時代には、現在のカフェのような明るい喫茶店は客の方が敬遠していた。店内が明る

八戸市の若者文化を牽引した「じゅねーぶ会館」

中園 裕

（県民生活文化課
県史編さんグループ主幹）

いという理由で入店を断る客も多かったという。青森県の場合、「三都」（青森・八戸・弘前3市）には相当数の店舗があった。このため各店舗がいろいろの仕掛けを試み、新しい設備を導入して誘客を競った。テレビが普及し始めた時期だったため、テレビのある店は評判がよかった。また、総じて看板娘のいる店が人気を集めた。

喫茶店は単にコーヒーを飲み、会話を楽しむだけの空間ではなかった。政治や経済を熱く語っていた若者たちのたまり場であり、サークル活動などの拠点でもあった。有志が集まって刊行していたタウン誌には、スポンサーとして喫茶店をはじめ、スナックやクラブなどの広告が映画広告と並んで多数掲載されていた。喫茶店は映画館と同様の文化の担い手だったのであり、若者たちを中心に人々が集まる拠点でもあったのだ。

八戸市内の喫茶店で人気を集め、若者文化の中心を担った店が六日町の「じゅねーぶ会館」である。1960年代には、会館1階にグラッドスナックの「ニューパンチ」、2階に喫茶店の「じゅねーぶ」とクラブの「眉」があった（写真1）。

じゅねーぶは、赤いじゅうたんが敷かれ豪華さに溢れていた。高度経済成長時代は豪華さを売り物とする店が人気だったので、華やかなじゅねーぶには大勢の客が集まった。店内にはラ

ジオのスタジオがあり、青森放送が毎週金曜日の夜8時から「じゅねーぶ・ミュージック・イン」という生番組を放送していた（写真2）。ラジオの実況中継は若者を中心に評判を呼び、それが店への客足を促した。

ニューパンチは店内数カ所に丸いカウンターがあり、男性のパーテンが客と向き合って話をする仕組みだった。話の上手なパーテンのいるテーブルは席がすぐ埋まった。このため、お目当てのパーテンと話ができない客は、とりあえず他のカウンターに陣取り、席が空くと急ぎ席を移った。店と客の駆け引きや客同士の見栄の張り合いが、夜ごとに展開されていたのである。

その後、1階のニューパンチは閉店し、新たに割烹「さんりく」が1972（昭和47）年7月25日から営業を始めた。2階の喫茶店「じゅねーぶ」は、その後も営業を続けたが、閉店してすでに久しい。しかし割烹のさんりくが、じゅねーぶ会館の面影を残す建物で、今も営業を続けている。